

私の学生時代

看護福祉学部
臨床福祉学科

講師 福間 麻紀



私は北星学園大学の社会福祉学科で心理学を学びました。子どもの頃から歴史や遺跡が好きで、将来は考古学を学びたいとずっと思っていました。進路選択時の友人との何気ない会話がきっかけで(内容は覚えていないのですが)心理学に興味を持ち目指すことに決めました。このような経緯だったため、自分としては本当にこの選択でよかったのだろうかという思いがぬぐえぬままの入学となっ



バドミントン部で体育大会に参加
(下から2段目の左端が私)

たわけですが、講義は面白く友人にも恵まれ、大いに大学生活を楽しみました。特に時間とエネルギーを費やしたのがクラブ活動と卒業論文です。

クラブ活動は初期費用が掛からないという理由で高校時代に引き続きバドミントン部に入りました。選手として強いわけでもなく、大学のサークルだからそれほど厳しくないだろうという甘い考えは見事に裏切られ、練習はほぼ毎日、部員が少ないために団体戦の選手にもなり、しっかり取り組まざるを得ない状況に。その分先輩後輩ともに仲がよく、一緒に食事や遊びに行くことも多く、一人暮らしの身には有難い関わりだったなと思います。

卒業論文は、当時ワープロの時代だったので、実験のためのプログラムの作成ができるパソコンが指導教授の研究室にしかなく、ゼミの友人と夏休みからずっと研究室に入り浸っていました。何度やり直



卒業論文提出後に研究室で
(前列左端が私)

しても思うように作動せず、「わからない!」と先生に泣きつく、「わからないことがわからないんだよね…」と言いながらも丁寧に指導してくださいました。また、締め切り近くにはゼミ生みんなが朝から晩まで研究室でワープロを打つ日々が続き、「今日は早く帰って子どもをお風呂に入れたらよ…」と独り言のようにつぶやきながらもつきあってくださいました。

大変なことも多々ありましたが、サークルやゼミの友人、指導して下さった先生の支えが合って乗り越えられたのだと改めて思います。私の人生においてかけがえのない人たちと出会えた学生時代でした。

私の学生時代

今、本学の教壇に立たれている先生たちは、学生時代をどのように過ごしていたのでしょうか。今回は福間麻紀講師と吉田晋教授のお二人に、当時の様子を語っていただきました。

私の学生時代

リハビリテーション科学部
理学療法学科
教授 吉田 晋



自分の学生時代はあまり誇れたものではありません。第一志望の大学が不合格で、仕方なく(?)選んだ道が理学療法でした。年間3万円程度という破格の学費に惹かれ、国立仙台病院附属リハビリテーション学院という養成校へ入学するのですが、やる気もなく入学しているので、当然勉強には身が入らず、3年生の臨床実習が始まるまでは



実習前の集合写真。上段真ん中のやる気のない青年が自分。

バイトに明け暮れる毎日で、1講目にちゃんと出席した記憶がありません。遅刻、欠席にとってもシビアな今の学生さんたちをみると、当時は呑気で良かったなと思います。

バイトは飲食業を中心に深夜まで頑張っていました。バイト代の大半はお酒と娯楽に消えていったように思いますが、最後に働いていた居酒屋では、その実力を高く評価していただき、新店舗の店長候補にもなっていました。一瞬、「こっちの世界で頑張らないか」との社長のお誘いに心揺らぎ、親に相談したのですが、当然猛反対にあい断念。もしあのまま飲食業界に身を置いていたら今頃違った人生を歩んでいたのではなかと空想しています。

そんな自分が変わるきっかけは臨床実習でした。患者さんを前にすると、変な責任感みたいなものが湧いてきて、ものすごく勉強したことを思い出します。回復が停滞していた脳卒中の患者さんを自宅へ退院させる



寮費も無料で、夜な夜な飲み会が開催されていました。

ために、色々なことを考え、工夫をしていました。結果的に目標を達成し、自宅退院させられた時の達成感と、あの時の患者さんご家族の笑顔が現在の自分へと導いてくれたのだと思います。

入学時にはまったくやる気もなく、居酒屋の店長になっちゃおうかとさえ考えていた自分が、卒業後、働きながら大学、大学院へと進学し、気がつけば教える側にいる…実習で出会った患者さん、指導して下さった先生、欠席した講義のノートをコピーしてくれた友人たち…何が欠けても今の自分は無いのだなと思うと、とても感慨深い気持ちになります。

成績不良の学生さん、不本意入学でやる気のない学生さん。きっと君たちにもそんな素敵な出会いが待っているかもしれません。まだあきらめるのは早いですよ。